

5-5			
主題	看取り介護における職員のモチベーション向上を引き出す多職種協働に関する研究		
副題	職員一丸で支援する為に「反照的習熟プログラム」を活用推進する事による、職員の意識の変化についての考察		
キーワード1	多職種協働	キーワード2	看取り
		研究(実践)期間	4ヶ月

法人名	社会福祉法人 園盛会
事業所名	特別養護老人ホーム 多摩の里けやき園
発表者(職種)	浅井裕貴(生活相談員)、鈴木春奈(介護職員)
共同研究(実践)者	末次千絵(生活相談員)

電話	042-460-8151	FAX	042-460-8152
----	--------------	-----	--------------

今回発表の事業所やサービスの紹介	平成17年に開設しました定員114名のユニット型施設です。全室個室で共用部もゆとりのある居住空間を提供しています。「その人らしさを大切に」の法人理念のもと、ご入居者に快適な生活を送れるように自立支援を行っています。
------------------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

平成27年度には15名のご入居者が当園で最期を迎えられた。それまで当園でお過ごし頂いたご入居者の体が衰え、食事が摂れなくなり、最期を迎えられるという過程は職員にとって大変辛い事である。

看取り後、職員から「ああすれば良かった」「こうすれば良かった」という声や「こんな時はどうすれば良いか」「初めてなので不安だった」等の声も聞かれた。

このように看取りの際に職員がそれぞれ感じていた思いがあると思うが、多職種協働で振り返り、共有する機会が乏しかった事が課題として挙げられる。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

左記の課題を克服するために何か良い方法はないか、と考え、看取り事例について職員間で振り返り、情報を共有する事を目的として「反照的習熟プログラム」を取り入れる事とした。

「反照的習熟プログラム」とは個人の看取りケアの内省と他者の看取りケアの内省を照らし合わせ、看取り事例を有効な知識として蓄積していくためのプログラムである。

実際の取組みの中で、これまでの実践や経験を数値や記録として具体化でき、今後の看取りの為にノウハウの蓄積に繋がる事を期待した。

また、この研究を通じて、看取りに関わる職員に意識変化をもたらす事につながり、いざ、最期を迎える場面に立ち会う際の覚悟や心理的負担を軽減する事につながる事も期待した。

《3. 具体的な取り組みの内容》

- ① 「反照的習熟プログラム」を参考に、看取りケアの振り返りについての独自のアンケート用紙を作成し、記入してもらう。これについては、決して上司がケア内容を評価する事が目的ではない事を明確にする事で、看取りの際に気付いた事や思いなどを正直に書いてもらう。
- ② アンケート用紙を回収し、集計表を作成する。集計表を各職員に配布し、看取りについて多職種で振り返る検討会を実施する。検討会では各職種または新人職員も忌憚のない意見交換ができる場とする。
- ③ 検討会后、職員にフィードバック票を配布し、記入してもらう。フィードバック票を集計し、参加した職員にとってどのような場であったかを確認できるファイルを作成する。

上記①～②の内容を平成 28 年 4 月～6 月までの期間に実施する。③については看取りに対する職員の意識の変化について検証する機会とし、7 月以降に実施する。

《4. 取り組みの結果》

はじめて看取りに関わる職員はもちろんの事、多くの看取り経験がある職員にとっても、人の死に向き合っていく事は不安と緊張の連続である。その経験を他職員と共有する事が出来た。

「ああ・・・あの先輩職員も同僚も同じ思いだったのだ」

「あれで良かったのか・・・悩んでいたが、それでも良かったのかも知れない」

以上のように、思い悩んだままにケアを終了してしまう事を防ぐ機会となった。

《5. 考察、まとめ》

他施設の取り組みや書籍などの情報は、重要な参考にはなるが、それまでに培ってきた施設の職員の経験を整理して、蓄積するノウハウが必要となってくる。

より良い看取りを実践するための仕組み作りが必要である。その仕組み作りをする事が、施設としても、職員個々としてもケアの力量を引き上げる事にもなる。

また、家族の意向や思いを支える視点も大切だが、ご入居者本人にとってどうだったのか？を第一に考える機会となった。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得た事とした。

《7. 参考文献》

看取りの振り返りを有効に実施するためのガイド 反照的習熟プログラムのすすめ
地方独立行政法人 東京都健康長寿医療センター研究所 執筆 島田千穂 共同研究者 平山亮 伊東美緒 中里和弘 原沢優子 樋口京子 <平成 28 年 3 月 15 日刊行>

《8. 提案と発信》

今後、特養に求められる看取り介護について、その人らしく最期を迎える為には「施設一丸」となって協働していく事が求められている。その為にも看取りをさせて頂いたご入居者一人ひとりが残してくれたものを点とするならば、その点と点を結び、看取りへのプロセスを根拠あるものにと考えていかなければならない。「看取りは施設の文化を作る」という言葉が参考文献にある。それぞれの施設に歴史やカラーが当然あるはずであるが、それを文化にまで高めていく事が求められているのではないだろうか。